

『子どもの心の扉は内側に鍵がある』



後志教育研修センター
所長 長谷川 誠

これは、研修講座の閉講式の挨拶の中で、述べた言葉です。実はこの言葉は、私が学級担任を持っていた頃にとても大切にしていたものです。教職について間もない頃、どこかの研修会でこの言葉に初めて遭いました。

そして、自分で大きい画用紙に書き、自分が担当する研修会や講座で紹介してきました。

それから、十数年経過して、この言葉が北海道家庭学校の校長であった谷 昌恒先生が言われた言葉であることがわかったのです。『教育力の原点～家庭学校と少年たち～』の本の中に納められている言葉です。この言葉に再び出会った時は、「ああ、この人の言葉だったんだ・・・」、心が震えました。

谷先生は、本の中でこのように綴っています。

「心の扉には取っ手は内側にしか付いていません。

外側には取っ手がないのです。

私たちは切に子どもの心を知りいと願っています。

心の扉の外側に取っ手があれば、君はどんなことを考えているの、さあ、あなたはどう、などと言いながら、さっさとその取っ手を手にとって、相手の心の中をのぞき見ることができるでしょう。

しかし、それができないのです。

外側に取っ手がないからです。」

当時は大変過酷な環境の中でありましたので、「自然の力だけが少年たちを更生させる」という創立者の留岡幸助校長の考えで、この地に家庭学校が建ったものだと思います。しかし、家庭学校に来た少年達は「なんで大人達は、俺をここに送ったんだ!」という気持ちしか持てなかったことだと思います。様々な、悩みを抱えて家庭学校にきた少年たちは、そう簡単に心を開くはずがありません。そのようなぎりぎりの状況の中で、谷 昌恒校長はこの言葉を発したのだと思います。

どうしたら、少年達が素直に心を開くようになるのか。それは技術やこつ等という問題であるよりも、私たち大人の人間としての生き方が問われていることだと思うのです。大人が素直に、包み隠しなく心を開いて、初めて少年達も心を開くのだと思います。

私達が表面は笑顔を装っていても、少しでも「この子は・・」と心の中で思っていたら、少年達の動物的な嗅覚が、私達のうそを鋭くかぎ分けてしまいます。みせかけだけの優しさは、少年達は大嫌いなのです。

その後、私は引き寄せられるように、教え子の卒業証書を渡しに家庭学校に行くことになります。運命の出あいだと感じました。

さて、今、先生方の目の前にいる子ども達はいかがですか。あなたに心を開いてくれていますか。教職員という肩書きの前に、一人の大人として、誠実に生きているか今一度、胸の鼓動に手を当てて自省してみたいものです。